

かべしろとみさうじ。どののはさまにたてり、

〔源氏物語二帶木〕かうしをあげたりけれど、かみ心なしとむつかりておろしつれば、火ともしたるすきかげさうじのかみよりもりたるに、略

〔家屋雜考〕障子 障子は屏障とて、戸、建具、衝立の類をもいふ名なれば、格子をさして、障子と云るせる事ども、中古以來の書に多し、明障子といふもの、そのかみは絹布などを用ひし故、うすもの障子などいふ事あり、皆格子の略なり、古代は紙あれども、後世の如く薄紙のかたきはなかりし事故、厚紙にてはりたるを被障ツスなどいひ、また紋がらなどあるを唐紙障子とはいひし事なり、〔松の落葉三〕障子からかみ

いにしへ障子といへるは、へだてにものするたぐひをすべていへる名なり、今の世にまやうじといへるものをば、むかしはあかり障子といひたりき、そは古今著聞集に、あかり障子のやぶれよりきとみればといへるにてまられたり、紙ひとひらなるゆるに、やぶれよりもの、見ゆるなり、同書に、清涼殿の弘庇についたち障子をたて、といへるは、今ついたてといふもの、さまざま、狭衣物語に、かみまやうじに、よべの御ぞをなんかけてさむらひつるとあるも、ついたちやうのものにこそ、かみまやうじとは、紙もてはれるをいふ、きぬにてもはるゆるに、かゝる名はあるなりけり、又江家次第第五の卷に、候於鬼間障子外暫閉障子戸と見え、宇治大納言物語に、へだてのまやうじのかけがねを、かけてきけると見えたるなどは、今ひらき戸といふものとおもはる、されば何にまれ、へだてにものするを、みなまやうじといへるになん、からかみとは、からの紙のめづらしきをもてはやして、いにしへはもの、へだてに、かくることありしをいへり、うつぼの物語樓の上の卷に、三尺のから紙をかけたまへりとあるを見てまべし、さて後は此からかみを障子にはりて、今のさまにはなれるなるべし、長門本の平家物語には、から紙のまやうじをたて